日本史新発見

～あの出来事の最新事情～

河合 敦氏
Atsushi Kawai

歴史作家・歴史研究家。多摩大学客員教授。早稲田大学非常勤講師。『歴史探偵』（NHK総合）などテレビ出演多数。歴史の意外なエピソードの紹介や分かりやすい解説に定評がある。著書に『渋沢栄一と岩崎弥太郎』『最強の教訓! 日本史』『最新の日本史』など。

第７回 〔最終回〕

「品川」はいつからあるのか？

関ヶ原合戦の翌年の1601年（慶長六年）、徳川家康は江戸の日本橋を起点として五街道を整備しました。そのうち最大の街道である東海道を日本橋から京都方面へ進んでいくと、最初に現れる宿が品川宿です。「宿」というと宿場町をイメージするかもしれませんが、もともとは幕府が公式につくった宿駅のことを指します。

宿駅には、公的な宿泊施設である本陣と脇本陣、さらに公用の人馬を継ぎ立てる問屋場が設けられました。参勤交代の大名は、こういった本陣・脇本陣に泊まり、問屋場で人馬の提供を受けました。

この宿駅を維持するためには商人や職人が必要なため、一般の旅人も含めて宿駅には大勢の人々が集まってきます。この需要をあてこんで旅籠や料理屋、茶屋や土産店などが並ぶようになり、やがて「宿場町」になっていきました。

ところで、この品川宿は何もない原野に家康が初めて宿駅を置いたわけではありません。平安時代にはすでに品川の地名があったことが確認されています。中世には良港（品川湊）として全国各地から船が集まり、品川の地は多くの人々で賑わっていました。

そのようなことから、品川宿は非常に規模が大きく、目黒川を挟んで北品川宿、南品川宿の２つで構成されていました。さらに、江戸中期になると高輪側に品川歩行新宿（しながわかちしんしゅく）という新たな宿場が立てられました。

品川宿はこのように巨大な町で大いに賑わっていましたが、とくに「北の吉原、南の品川」と称されたように、吉原同様、遊女（飯盛り女）を500人抱えることが認められたので、大歓楽街となりました。

また、品川にある御殿山の桜や海晏寺（かいあんじ）の紅葉、浜辺の潮干狩りなどは行楽地としても有名であり、旅人以外にも江戸から多数の観光客が宿場に集まってきました。また、品川には名物も生まれました。海に近いこともあって、やはり海の幸が最も有名でした。代表的なのが芝肴（小魚）、芝海老、そして品川の海で養殖された海苔が人気でした。

現在は、江戸時代の宿場の建物は失われてしまいましたが、当時の地割りや寺社が残っており、宿場の面影を見ることができます。

ちょこっと旅ガイド

【品川区立品川歴史館】 東京都品川区大井　JR京浜東北線 大森駅から徒歩10分

品川区立品川歴史館では、常設展示で品川にまつわる歴史が分かりやすく解説されています。館内には江戸時代の街並みが模型で再現されています。また、本陣や土蔵相模の解説もされていて、品川宿の歴史を深く学ぶことができます。入館料は100円（特別展・企画展開催中は入館料が異なります）、月曜休館。